

今年度は令和7年5月4日(日)から令和7年5月10日(土)にかけて関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選が行われ、各会場で熱戦が繰り広げられた。優勝は習志野高校、準優勝は八千代高校、3位は専修大松戸高校、市立柏高校という結果になった。

【大会の傾向】

今年度は新人大会のベスト8のチームが出場権を確保し、県1部から3部に所属するチームであった。優勝した習志野高校は、準決勝で同1部リーグに所属する専修大松戸にリーグ戦のリベンジを果たしている。トーナメントということもあり、戦い方やシステムなどを変化させ、勝負強いサッカーを決勝戦まで続けた。準優勝した八千代高校は、準々決勝から1点差のゲームを制するなど、先制されても慌てずに自分のたちのサッカーを貫き、決勝まで勝ち進んできた。

優勝した習志野高校は3試合で1失点という守備の堅さが特徴的であった。3バックは高さがあり、ロングボールやクロスボールを的確に跳ね返す強さがあった。また奪ったボールを前線の選手に供給し、セットプレーを獲得する所も特徴的であった。習志野高校は後半から出場した交代選手の活躍が勝利を手繰り寄せ、スターティングメンバーだけでなく総合的なチーム力の高さも示した。このような部分もトーナメントを勝ち上がったチームの特徴として捉えられる。準優勝した八千代高校は、GKから丁寧にビルドアップを試みるチームであり、相手を観て攻め手を探っていた。準決勝・決勝と5バックで守る相手に対して、攻撃の糸口を見つけないながら、丁寧に繋いでいきゴールを目指していた。ベスト4に進出した専修大松戸は、縦に速い攻撃スタイルを貫きつつも、相手コートに入るとイマジネーション豊富な選手が多彩なアイデアでゴールに迫った。市立柏は3部リーグ所属だが、格上相手に勇敢に挑み、相手のストロングポイントを消しつつ、素早いカウンターを武器にして、ベスト4に進出した。

しかし、一発勝負ということもあり、リスクを冒さずロングボールから攻撃の糸口を探すチームが全体的に多かった。相手を観てボールを動かし、ショートパスとロングパスを有効に使い攻撃の糸口を見出すチームがもっと出てくると、再現性のある攻撃が生まれ、ゴール前の攻防がもっと見ごたえのあるものになるのではないか。また、セットプレーから多くの得点生まれ、特に飛距離のあるロングスローが特徴的であった。デザインされたセットプレーに対する組織的な守備構築とルーズボールへの対応には課題が残る。セットプレーが多い反面、アタッキングサードの質についても課題が残る。個での打開、コンビネーション、ワンタッチプレー、コントロール・シュート・クロスの質、クロスの入り方・タイミングなどを、状況を観て判断し、サッカーの本質である「ゴールを奪う」という部分に日常からフォーカスして取り組まなければならないであろう。

【最後に】

今大会の決勝戦は2年連続の公立校対決となった。堅い守備をベースに勝ち上がり2連覇となった習志野高校、2大会ぶりの出場となった八千代高校、3部リーグ所属ながらベスト4に進出する快進撃を見せた市立柏高校など、改めてサッカーというチームスポーツの面白さを感じた。また、各会場において多くの観客が見守る中、ピッチに立つ選手たちはエネルギー溢れる試合を展開していた。改めてサッカーができることを幸せに感じる。今大会が開催され無事終わられたこと、また、大会の運営に携わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すと共に、優勝した習志野高校、準優勝した八千代高校の関東大会での躍進を期待し、令和7年度関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選会の総評とさせていただきます。

千葉県立幕張総合高等学校 島田 健司